

女子大学生の規範意識に関する研究 (2)

ー 反社会規範行為に関する認知的側面からの分析ー

安藤 明人

(武庫川女子大学文学部教育学科人間関係コース)

Norm consciousness in female college students(2): An analysis on the cognitive aspects of anti-norm deviant behaviors

Akihito Ando

*Department of Human Relations, Faculty of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan*

The present study was conducted to examine the cognitive aspects of anti-norm deviant behaviors in female college students. 262 subjects were requested to complete the questionnaire on attitude or cognition toward 30 deviant behaviors from three different viewpoints such as (1) how often they think they themselves deviate from those norms, (2) how often they think their ordinary classmates deviate from those norms, and (3) how often their ordinary teachers imagine they deviate from those norms. The main findings are as follows: (1) Female college students admit their inclination to deviation from norms in school, but they believe that such behaviors are not so deviant by nature. (2) They think that they themselves are more normative than their ordinary classmates. (3) They think that their teachers have worse impression on their norm consciousness than they really are. These results suggest that the bad images of female college students toward their classmates and teachers implies their feelings of maladjustment to their own college.

緒言

近年、若者の規範意識の低下が問題にされることが多い。そしてその若者の代表として大学生の意識や態度がひきあいに出され、問題化される。「レジャーランド化した大学」「勉強するつもりは初めからなく、公認された4年間の休暇のつもりで大学に入学してくる大学生」「バイトに精を出す大学生」「高価なブランド品で身を固めた女子大学生」などと、マスコミを通して語られる大学生像は、大学生の一般的なイメージとして定着してしまっている。しかしこの大学生像は一面の真実を表わしてはいても、それによって日本の大学生のすべてを語ってしまうことには、一般的な大学生の実像を見誤る危険性がつきまとう。

また大学や大学生を語る時、それらを取りまく社会や環境の急激な変化を忘れて、依然として、「学問の深奥を極める高等教育機関」が大学であるという、ひと昔前のアカデミズムの牙城としての大学のイメージを前提として、その最高学府に学ぶ大学生というイメージで現代の大学生を見ている。そしてその理想の(あるいは過去にそうであった)大学生像と現代の大学生像とのギャップの大きさに、ことさら驚き、嘆くという図式が、現代の大学生に対する批判の一般的パターンである。

確かに学校教育法第52条には、大学の目的・教育目標は「学術の中心として、広く知識を授けるとともに、

深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させること」であると述べられている。しかし、大学への進学率が35%を越え、大衆化した現代の大学にあっては、この言葉がいかに空虚に響いてくることか。大学進学率の上昇は大学の大衆化を推し進め、その過程で大学の差別化が急速に進行した。その結果、従来のアカデミックな学問研究は、一部の限られた大学に任せて、その他の多くの大学は、学生のレベルとニーズにそうかたちで、資格・技術の獲得をめざした実践的な職業教育にそのカリキュラムを傾斜させていっているのが現状である。つまり現在、大学においてアカデミズム重視からコンシューマリズム重視への転換が急速に進行しつつあるのである。

このような大学の内部環境の変化、および大学をとりまく外部環境の変化が、そこに所属する大学生の意識や態度に大きな変化をもたらしたとしてもそれはなんの不思議でもない。大学生がエリートであり、「大学卒」という肩書が、その後の人生における成功と幸福を約束する手形でありえた過去の時代と、大学生であること、あるいは大学卒であることが何の特別な付加価値を与えない現代とでは、同じ大学生であっても、そこに意識、態度、価値観などに相違が見られることはしごく当然のことであると思われる。

現在のマスコミ論調、そして世論の大勢を見てみると、そのような大学生の意識の「変化」を、暗黙のうちに意識の「低下」と読み替えてしまっているように思われる。しかしすべての「変化」が「低下」であるはずはない。そこで現代の若者の意識が本当に変化しているのかどうか、そしてもし変化しているのなら、その「変化」を一括して「低下」と呼ぶことが果して妥当なのかどうか、という点についてここで改めて検討してみることは、現代の若者の実像に迫る上で重要な意義をもつものと考えられる。そこで本研究では、現代の女子大学生の規範意識に焦点を当て、その分析を通して、その背後にある若者の意識の「変化」の解明を行いたいと考える。

本研究の直接の先行研究である安藤明人(1990a)¹⁾では、男子大学生と女子大学生の場合で、反社会規範行為の許容度に関してどのように異なった認知をしているか、という観点から女子大学生の規範意識について検討がなされた。その結果、①同じ反社会規範行為をしても、反法的、反社会的慣習、反家庭内の3つの規範行為においては、女子大学生の方が有意に許容度が低く、反学校内規範行為においてのみ、男女間の許容度に有意差はみられない、②このような規範行為に関する性の違いによる認知の相違(つまり、ダブル・スタンダード)が大きい女子大学生は、それが小さい女子大学生と比較して、女子大学生の反社会規範行為に対する認知には差がみられないが、男子大学生の反社会規範行為に対しては、有意に甘い(つまり許容度が高い)認知をもっている、ことなどが明らかにされた。

そこで本研究では、「自己の反社会規範行為」、「他の学生の反社会規範行為」、「教師が学生の反社会規範行為に対していただいているイメージ」、それぞれに対して女子大学生がもっている認知を明らかにし、その3者の間の認知的ギャップの分析を通して、女子大学生の規範意識の態様を明らかにすることを目的とする。

方法

被験者および調査の実施

調査は、私立大学および短期大学部の学生262名を対象として、「女子大学生の行動に関する調査」の名目で、1989年12月から1990年1月にかけて、無記名方式で実施された。なおこのうちの142名については、1989年4月から5月にかけて実施した「女子大学生の生活意識調査」(安藤, 1990b)²⁾の被験者にもなっており、2つの調査に共通する本人しかわからない暗唱番号の照合により、その調査でえられた人格特性に関する結果と規範意識との関連について調べることが可能となっている。

調査の内容

分析対象とした規範行為は、女子大学生の日常生活にかかわりが深く、一般にそれを守ることが期待されている行為であるが、そこから逸脱する可能性が比較的高いと推測される行為30項目である。調査ではこれらの項目は、反社会規範行為として被験者に提示され、これに対する意識・態度が調べられた。この反社会規範行為は、清水賢二(1989)³⁾の分類にしたがって、反法的規範行為(4項目)、反社会的慣習行為(6項目)、反学校内規範行為(12項目)、反家庭内規範行為(8項目)、に分類された。

これら30項目の反社会規範行為に対する被験者の意識・態度について、次の4つの観点から回答が求められた。①女子大学生の場合と男子大学生の場合のそれぞれについて、そのような行為がどの程度許容されると思う

か(「許される」「やや許される」「やや許されない」「許されない」の4件法による回答)．②同じ大学の普通の平均的な学生がそのような行為を現実にとどの程度していると思うか(「よくする」「ときにはする」「ほとんどしない」「全くしない」の4件法による回答)．③平均的な教師は、平均的な学生がそのような行為をどの程度していると考えていると思うか(「よくする」「ときにはする」「ほとんどしない」「全くしない」の4件法による回答)．④被験者本人が、そのような行為を現実にとどの程度しているか(「よくする」「ときにはする」「ほとんどしない」「全くしたことがない」の4件法による回答)．なお④については、回答するのに問題があると思われる4項目をあらかじめ削除し、更にNA欄も設けた。

なお、「女子大学生の生活意識調査」において、被験者の人格特性を調べるために用いられた尺度の詳細については、安藤(1990a)¹⁾、安藤(1990b)²⁾を参照されたい。

結果と考察

反社会規範行為をどの程度行なっているか

まず最初に、女子大学生が実際に反社会規範行為をどの程度行なっているかについて検討してみる。本研究で取り上げた30の反社会規範行為のうち、回答を求めるのに問題があると思われる4項目(Table 1参照)を除いた、26項目について、このような反社会規範行為を自分が日常どの程度しているかについて尋ねた。その結果がTable 1に示されている。ここに示された数値は、「よくする」を1点、「ときどきする」を2点、「ほとんどしない」を3点、「全くしない」を4点として計算されたものであり、したがって、この数値が低いほどそのような反社会規範行為の実行率が高いことを意味している。これによると、平均評点が3点以上の実行率が低い反社会規範行為は、「タバコをすう」(3.86)、「テストでカンニングをする」(3.85)、「借りたものを返さない」(3.58)、「代返・代筆をする」(3.39)、「理由を偽って親から金をもらう」(3.24)、「教室にゴミを捨てる」(3.13)、「親に隠れて特定の異性と交際する」(3.04)の7項目であった。これに対して、平均評点が2点未満の実行率が高い反社会規範行為は、「授業中に私語をする」(1.84)、「勉強しない」(1.97)、「陰で先生の悪口を言う」(1.99)の3項目であった。この3項目はいずれも反学校内規範に分類されるものであることに注目する必要がある。

規範からの逸脱が多い行為は、一般に規範そのものに問題があると認知される傾向にあり、したがってその規範からの逸脱がそれほど悪いことであると認知されていない場合が多い。また人々がそのような規範に同調する場合でも、その規範を内面的に受容したからではなく、なんらかの社会的強制力を伴う否定的サンクション(たとえば、罰)によって同調させられているのだという意識をもっている場合が多い。このことを考えると、この3項目については、女子大学生は、規範そのものに問題を感じ、その規範から逸脱することにそれほどの罪悪感を感じていないのかもしれない。

次に、反社会規範行為の実行の程度と人格特性との間の関連について検討してみる。規範意識の調査の被験者の中で、同時に「生活意識調査」の被験者でもある142名を対象として、以下のような上位-下位分析により、両者間の関連性について検討を行なった。

反社会規範行為の実行の程度を点数化した値を、26項目について合計し、その合計値をもって、各個人の反社会規範行為の実行の程度を示す指標とした。この値は低いほど、その被験者が反社会規範行為をよく行なうことを意味している。142名の平均値は68.5(SD=10.1)、最高が91、最低が37であった。この中から、得点合計が上位25%にはいる者(N=32、得点範囲は78~91)と、下位25%にはいる者(N=31、得点範囲は37~64)を抽出し、前者を規範遵守群、後者を規範逸脱群と名付けた。そして、規範遵守群と規範逸脱群の間で人格特性にどのような違いがみられるか、25の下位尺度について比較検討を行なった。

その結果、独自性欲求と神経症傾向の2つの尺度において、両群の間に5%水準の有意差がみられ、自己充足性、伝統志向性、妥当性の3つの尺度において傾向差が認められた。「ユニークでありたい」という欲求の強さを測定する独自性欲求尺度では、規範逸脱群のほうがその欲求が有意に強く(規範遵守群; $\bar{x}=85.8$, SD=11.8, 規範逸脱群; $\bar{x}=92.0$, SD=11.6, $t=2.07$, $p<0.05$)、このことから、規範からの逸脱は単なる放縦ではなく、人間本来の「ユニークでありたい」という根源的な欲求の強さと関連していることが示唆された。

神経症傾向は規範逸脱群の方が有意に高いが(規範遵守群; $\bar{x}=4.19$, SD=2.21, 規範逸脱群; $\bar{x}=5.65$,

Table 1. Cognition toward 30 anti-norm deviant behaviors from three different viewpoints

#	分類	項 目	平均的女子大学生 に関する認知			教師がいただくイメ ージに関する認知			自己に関する認知		
			N	\bar{x}	SD	N	\bar{x}	SD	N	\bar{x}	SD
1	学校	陰で先生の悪口を言う	262	1.61	0.54	260	1.70	0.56	262	1.99	0.58
2	家庭	家の手伝いをしない	262	2.31	0.69	260	2.25	0.74	261	2.41	0.77
3	家庭	理由を偽って親から金をもらう	262	2.60	0.81	259	2.55	0.77	262	3.24	0.82
4	学校	代返・代筆をする	262	2.45	0.84	259	2.21	0.79	262	3.39	0.78
5	慣習	遅くまで夜遊びをする	262	2.15	0.68	260	1.97	0.66	262	2.68	0.85
6	学校	学校で決められた制服を着ない(異装)	262	1.76	0.80	260	1.60	0.76	262	2.47	0.91
7	慣習	借りたものを返さない	262	3.18	0.69	260	3.24	0.73	261	3.58	0.62
8	法	人のものを盗む	261	3.60	0.64	260	3.47	0.70	---	---	---
9	慣習	約束の集合時間に遅れる	261	2.41	0.69	260	2.37	0.74	260	2.65	0.79
10	慣習	電車やバスなどでお年寄りに席をゆずらない	261	2.18	0.68	260	2.22	0.78	261	2.28	0.72
11	学校	先生の言うことに従わない	262	2.28	0.70	260	1.98	0.81	262	2.61	0.70
12	学校	勉強しない	261	2.07	0.72	260	1.97	0.81	262	1.97	0.71
13	法	信号無視をする	261	2.00	0.73	260	2.19	0.81	262	2.12	0.81
14	家庭	母親に反抗する	262	2.14	0.64	259	2.27	0.68	260	2.27	0.75
15	家庭	親に隠れて特定の異性と交際する	262	2.11	0.83	260	2.03	0.73	258	3.04	1.00
16	学校	テストでカンニングをする	261	3.44	0.67	260	3.13	0.80	260	3.85	0.46
17	家庭	親のいいつけに従わない	261	2.22	0.66	259	2.21	0.71	261	2.39	0.73
18	学校	校友会行事に参加しない	262	2.07	0.80	259	2.08	0.86	261	2.64	0.94
19	家庭	父親に反抗する	262	2.29	0.72	260	2.37	0.74	260	2.54	0.84
20	法	20歳未満の大学生が酒を飲む	262	1.47	0.63	260	1.52	0.69	260	2.07	0.83
21	家庭	遊んでいて家の門限に遅れる	262	1.98	0.73	260	1.97	0.79	260	2.62	0.91
22	家庭	親の反対を押し切って恋人と同棲する	262	3.37	0.65	258	3.22	0.71	---	---	---
23	学校	大学行事に参加しない	262	2.03	0.85	260	2.02	0.84	260	2.36	0.92
24	学校	講義をさぼる	262	2.05	0.72	259	1.93	0.76	261	2.70	0.86
25	慣習	二人の間で結婚を約束した恋人とセックスをする	258	2.36	0.86	258	2.48	0.82	---	---	---
26	学校	気に入らない人(学生)と話をしない	260	2.30	0.78	259	2.44	0.74	260	2.66	0.83
27	学校	授業中に私語をする	262	1.49	0.61	259	1.28	0.58	262	1.84	0.64
28	慣習	知り合ってまだ日が浅い異性の友達とセックスをする	261	3.15	0.72	259	3.12	0.74	---	---	---
29	法	20歳未満の大学生がタバコをすう	262	2.53	0.91	260	2.40	0.86	261	3.86	0.51
30	学校	教室にゴミを捨てる	262	2.10	0.86	260	1.74	0.83	262	3.13	0.75

注)平均評点は、「よくする」を1点,「ときにはする」を2点,「ほとんどしない」を3点,「全くしない」を4点,として計算された値である。

SD=3.18, $t=2.12$, $p<0.05$), これが直接反社会規範行為の実行と関連しているかどうかについては, これだけの資料では判断がむずかしい。

平均的女子大学生は反社会規範行為をどの程度行なっていると認知しているか

次に, 自分と同じ大学に所属する平均的な女子大学生の反社会規範行為について, 被験者となった大学生はどのように認知しているのだろうか。

Table 1 に示された結果から, 平均評点が3点以上で, そのような反社会規範行為はあまりしないであろうと認知されている項目をリストアップしてみると, 「人のものを盗む」(3.60), 「テストでカンニングをする」(3.44), 「親の反対を押し切って恋人と同棲する」(3.37), 「借りたものを返さない」(3.18), 「知り合ってま

だ日が浅い異性の友達とセックスをする」(3.15)、の5項目があげられる。このうちの2項目は(他の3項目は、回答を求めるには問題があるとして、実行率の質問項目からは事前に除外されていた)、先の分析で現実の実行の程度についても3点以上を示し、逸脱する程度が低かった項目である。したがって、これらの規範行為は、女子大学生にとって規範性が強く、そこからの逸脱行為には否定的なサンクションが強く働くものと認知されているといえる。そのために、自分もそのような反社会規範行為を実際にしないし、自分以外の他の女子大学生もそのような行為はしないと考えられているのであろう。

平均評点が2点未満で、普通的女子大学生であつたらするだろうと認知されている反社会規範行為は、「酒を飲む」(1.47)、「授業中に私語をする」(1.49)、「陰で先生の悪口を言う」(1.61)、「学校で決められた制服を着ない(異装)」(1.76)、「遊んでいて家の門限に遅れる」(1.98)、の5項目であつた。これらの項目は、女子大学生にとって規範性が弱いと認知されている反社会規範行為であり、実際、これらの反社会規範行為の実行率を見てみると、総体的に低い値を示している。しかしいずれの項目についても、実行率のほうが値が大きくなっており、このことから、これらの反社会規範行為については自分もするが、他の学生の方がもっとするだろうと認知されていることがわかり、興味深い。つまり、今回の研究対象になった学生は、自分の所属する大学の仲間の規範性について、より厳しい見方をしているといえる。このような同じ集団に所属する仲間に対する低い評価は、そのような評価を下す学生の側の、自分の所属大学に対する不適応感を表わしたものとも解釈できる。

それでは、所属大学の仲間の規範性に対する認知と認知する側の人格特性との間にはなんらかの関連性がみられるであろうか。142名の学生を対象として、次にその点について分析してみる。

方法は、前の実行率と人格特性との関連の分析と同様に上位-下位分析を用いた。まず、30項目の合計評点($\bar{x}=68.9$, $SD=12.7$)の上位、下位それぞれ25%の学生を抽出し、上位25%を「好意群」($N=35$, 得点範囲は78~104)、下位25%を「非好意群」($N=34$, 得点範囲は41~58)と名付けた。そして好意群と非好意群の間で、人格特性を比較した。

両群間の人格特性に統計的な有意差がみられた下位尺度は、社会不安(好意群; $\bar{x}=19.3$, $SD=4.74$, 非好意群; $\bar{x}=17.1$, $SD=3.60$, $t=2.14$, $p<0.05$)、無力感(好意群; $\bar{x}=18.3$, $SD=4.31$, 非好意群; $\bar{x}=16.2$, $SD=4.10$, $t=2.04$, $p<0.05$)、の2項目であつた。また、積極性は非好意群の方が強く(好意群; $\bar{x}=9.5$, $SD=2.16$, 非好意群; $\bar{x}=10.4$, $SD=1.80$, $t=1.93$, $p<0.1$)、心気症傾向は好意群の方が強い(好意群; $\bar{x}=3.94$, $SD=2.68$, 非好意群; $\bar{x}=2.73$, $SD=2.38$, $t=1.94$, $p<0.1$)傾向がみられた。

これらの結果を総合すると、同じ大学の仲間の規範性を高く評価している好意群の学生ほど、社会不安、無力感、心気症傾向が強く、積極性が低い傾向にあり、このことからこれらの学生は不適応感を強くもっていることが推測される。好意群の学生が、自分以外の他の学生の規範性を高く評価することは、実は、自分を低くしか評価できないことの裏返しなのかもしれない。

教師が学生の反社会規範行為の実行に対していただいているイメージをどのように認知しているか

いままで、自己の反社会規範行為に対する認知、他の学生の反社会規範行為に対する認知、とみてきたが、最後に、学生の反社会規範行為の実行について教師がどのようなイメージをいただいていると、学生が認知しているかについて検討してみる。つまりこれは、女子大学生の規範意識を、反社会規範行為について、自分たち学生が教師からどのような目でみられていると思っているか、という観点から分析しようとするものである。

いままでと同じ30の反社会規範行為について、上述の「教師のイメージにある女子大学生」という観点から学生に回答を求めた。その結果がTable 1に示されている。平均評点が3点以上で、教師によって女子大学生はあまりしないであろうというイメージでみられていると思っている反社会規範行為は、平均的学生の反社会規範行為に対する認知の場合と全く同じ5項目であつた。したがって、「人のものを盗む」「借りたものを返さない」「親の反対を押し切って恋人と同棲する」「テストでカンニングをする」「知り合ってまだ日が浅い異性の友達とセックスをする」の5つの反社会規範行為については、女子大学生は、自分はもちろんしないし、他の学生もしないであろうし、教師もしないとみられているだろうと思っている。つまりこれらの行為に対しては、被験者は、自分と他の学生と教師の間の認知的なギャップを感じていないといえる。このことよりこれらの行為は、認知的ギャップが生じる余地がないほど規範性が強いと学生に認知されているものと考えられる。

次に、教師によって逸脱傾向が強いと見られている、と学生が認知している反社会規範行為を、平均評点2点

未満を基準にリストアップすると、「私語をする」(1.28)、「酒を飲む」(1.52)、「制服を着ない」(1.60)、「先生の悪口を言う」(1.70)、「ゴミを捨てる」(1.74)、「講義をさぼる」(1.93)、「夜遊びをする」(1.97)、「勉強しない」(1.97)、「家の門限に遅れる」(1.97)、「先生の言うことに従わない」(1.98)、と10項目もあげられる。このことから、被験者となった女子大学生は、自分たちが教師から規範を守らないと見られている、と認知していることがわかる。つまり、教師は自分たちの規範意識について低い評価しか与えていないだろうと想像しているのである。この点については、あとのところで、自己の反社会規範行為に対する認知、他の学生の反社会規範行為に対する認知、そして教師による学生の反社会規範行為に対する認知についての学生の認知、の数値をそれぞれ比較することにより、更に詳細に分析する。

自分たち女子大学生の規範意識は、教師から良くみられていると認知するか、悪くみられていると認知するかの違いは、認知主体の女子大学生の人格特性と関連しているであろうか。この点について、次に検討する。方法は、前と同じ上位-下位分析による。30項目の合計評点($\bar{x}=67.1$, $SD=13.4$)の高い者、つまり自分たち女子大学生の規範行為に対して教師は良いイメージをいただいていると認知している者上位25%を「良群」($N=33$, 得点範囲は77~102)とし、下位25%(教師は悪いイメージをいただいていると認知している者)を「悪群」($N=37$, 得点範囲は43~58)として、両群間の人格特性を比較した。その結果、LSO-E(孤独感)と女性的性役割への不適応感の2つの下位尺度に傾向差がみられただけで、反社会規範行為に対する教師イメージの認知と認知主体の人格特性との間には、はっきりとした関連性は見いだせなかった。

平均的女子大学生の反社会規範行為に関する認知と教師の学生の反社会規範行為に対するイメージに関する認知との比較

同じ大学に所属する平均的女子大学生の反社会規範行為に関する認知と教師の学生の反社会規範行為に対していただいているイメージに関する認知の間に、ギャップが存在するかどうかを検討するために、30項目の反社会規範行為に対する平均評点を両者間で比較した。

その結果、両者間に統計的に有意な認知的ギャップが認められたのは12項目であった。このうち9項目(「代返・代筆をする」「夜遊びをする」「制服を着ない」「人のものを盗む」「先生の言うことに従わない」「テストでカンニングをする」「親の反対を押し切って恋人を同棲する」「私語をする」「教室にゴミを捨てる」)は平均的女子大学生の反社会規範行為についての評点の方が高く、したがってこれらの項目は、教師が思っているほど平均的女子大学生はそのような行為をしていない、と女子大学生に認知されている反社会規範行為であるといえる。ここで、この内の6項目までが反学校内規範に属する項目であることに注目する必要がある。この反社会規範行為に関する認知的ギャップは、視点を変えれば、女子大学生は学校での行動について自分たちが教師から信用されていないと認知していることを示唆するものであるといえる。ここに女子大学生が教師に対していただいているある種の不信感を読みとることができる。この「自分たちは理解されていない」という学生側の気持ちが、教師と学生とのコミュニケーションをむずかしくしている原因であるのかもしれない。

一方、教師が思っている以上に規範から逸脱している学生が多いと認知されている項目は、「信号無視」「母親に反抗する」「気に入らない人(学生)と話をしない」の3項目であった。

平均的女子大学生の反社会規範行為に関する認知と自己の反社会規範行為に関する認知との比較

次に、自分と同じ大学に学ぶ平均的女子大学生の反社会規範行為に対してもっているイメージと自分自身の反社会規範行為に関する認知とが、どのような関係にあるか検討してみる。そこで26項目(前述したように、自己の反社会規範行為に関しては、4つの項目が質問から除外された)の反社会規範行為に対する平均評点を比較することによって、自己の行為と仲間の行為との間の認知的ギャップがどのような形で存在しているかを明らかにしようとした。

その結果、26項目中22項目について、統計的に有意な認知的ギャップが見いだされた。この認知的ギャップの統計的な有意水準は、「母親に反抗する」が5%、「親の言いつけに従わない」が1%であって、それ以外の20の反社会規範行為については0.1%水準となっている。このことから、この自己の規範行為と仲間の規範行為の間に存在する認知的ギャップは、きわめて大きなものであることがわかる。そしてその22の反社会規範行為のすべてについて、平均的女子大学生に対する平均評点よりも自己に対する平均評点の方が有意に高くなっていった。このことは、被験者が、平均的女子大学生に比べて、自分自身は反社会規範行為をあまりしないと認知し

ていることを意味している。つまり、被験者となった多くの女子大学生が、自分はしっかりと規範を守っているのに、自分以外の学生はあまり規範を守ろうとしない、という認知をもっていることをこの結果は示唆しているといえる。

反社会規範行為に関する自己と仲間の学生との間に認知的ギャップが見られない項目は、「家の手伝いをしない」「電車やバスなどでお年寄りに席を譲らない」「勉強しない」「信号無視をする」の4項目であった。これらは、いずれも「自分もそう(反規範的)であるが、他の学生も同じである」というように、そのような反社会規範行為をよくするという点で認知が一致している。

以上の結果から、たとえば「今の女子大学生は規範意識が低い」とマスコミで非難されたり、「この大学の学生は授業中に私語が多い」と教師から注意を受けたとしても、この非難や注意を多くの女子大学生はひとごとのように受けとめて、自分自身の問題としては意識化していない可能性が示唆される。

教師の学生の反社会規範行為に対するイメージに関する認知と自己の反社会規範行為に関する認知との比較

最後に、教師が自分たち女子大学生の反社会規範行為についてどのようなイメージでみているかという認知と、自己の反社会規範行為に関する認知とがどのような関係にあるか検討する。26項目の反社会規範行為について、教師イメージとして認知された平均評点と、自己の反社会規範行為についての平均評点との比較を行なった。

その結果、26項目中22項目においてきわめて大きな認知的ギャップが認められた。そして、この22のすべての反社会規範行為において、教師イメージについて認知された平均評点よりも、自己に関する平均評点の方が有意に高くなっていった。このことから、被験者は、教師は自分たち女子大学生がそのような反社会規範行為をよくすると思っているだろうが、自分はそのような行為はあまりしない、と考えていることがわかる。ここには、自分たちは、教師からあまり良くみられていない、という女子大学生の意識が反映されているものと解釈できる。

教師イメージの認知と自己認知との間にギャップがみられなかった項目は、「お年寄りに席を譲らない」「勉強しない」「信号無視をする」「母親に反抗する」の4項目で、これは女子大学生自身がそのような行為をすることを認めているために、総体的に低い評価しか自分たち学生に与えていないという教師イメージの認知と、自己認知との間にギャップが見られなかったのであろう。

まとめ

安藤(1990a)¹⁾は、女子大学生の規範意識には、男性の場合と女性の場合で異なった基準(すなわち、ダブル・スタンダード)が働いていることを明らかにした。本研究では、その知見を受けて、反社会規範行為を行なう程度に関する認知という側面から、女子大学生の規範意識の態様を検討した。つまり、自分が行なっている反社会規範行為に関する認知、他の平均的な女子大学生が行なっている反社会規範行為に関する認知、教師が学生の反社会規範行為についていっているであろうイメージに関する認知、という3つの異なる視点から、女子大学生の規範行為に対する認知を調べ、それらの認知の異同を相互に比較検討することにより、複雑な規範意識の構造に迫ろうと考えたのである。

本研究で明らかにされた重要な知見の第1は、女子大学生は、「私語をする」「勉強をしない」「先生の悪口を言う」といった、いわゆる学校内規範から逸脱した行為をすることを自ら認めている点である。しかもそのことをそれほど悪いことだとは認知していないことは、安藤(1990a)¹⁾で報告された、これらの反社会規範行為に対する許容度の結果から推測することができる。この結果によると、これらの反社会規範行為を女子大学生がすることをどう思うかという質問に対して、「私語をする」が2.39、「勉強をしない」が2.34、「先生の悪口を言う」が1.59という平均評点を示し(「許される」を1点、「やや許される」2点、「やや許されない」3点、「許されない」4点として計算した値)、これらの行為に対して、女子大学生は「許されない」より「許される」方向にかたよった認知をもっていることが明らかにされた。つまり、以上の結果から、女子大学生のこれらの反社会規範行為に対していっている気持ちを端的に表現すれば、「これらの行為をたいして悪いとは思っていないので、実際にそのような行為をしている」ということになろう。

今回得られた重要な知見として指摘すべき第2の点は、女子大学生の同じ大学に所属する仲間の学生に対する認知の分析、そして教師からイメージされている自己像に対する認知の分析、という2つの視点からの規範行為に関する分析を通じて、「不信の構造」とでもいうべきものが浮かび上がってきたことである。すなわち、結果

から明らかになったように、被験者となった女子大学生は、社会的規範にそった行動をしようとする自らの規範性について、同じ大学の平均的な学生よりは高いと考えている。つまり自分のことを全く逸脱行為をしないような聖人君子のような人間だとは見ていないが、しかし、少なくともまわりにいる仲間よりは規範を良く守る人間だと認知しているのである。このような気持ちがどのような過程を経て彼女らに醸成されたかについては、今回の研究では探ることはできない。しかし、少なくともこのような気持ちをいただいている学生が、自分の所属する大学に対してあまり強い帰属意識をもっていないことは容易に推測できる。そしてこの結果から、「自分はみんなとは違うのだ」という意識を顕在化させ、規範性の低い仲間と自分とを切り離すことで、なんらかの原因（たとえば、不本意入学や大学に対する不適応感）で低下した自尊心を高めようとしている学生の姿を読みとることができる。

また学生たちは、自分たちの規範意識について教師から良いイメージで見られていないと思っている。つまり、教師は自分たちを規範意識の希薄な人間だとみている、と彼女たちは思っている。ここにも学生と教師との間の「不信の構造」をみてとることができる。このことは、自己の反社会規範行為についての認知と反社会規範行為について教師イメージに関する認知との間に認められた、大きな認知的ギャップの存在から推測することができる。

女子大学生たちが、教師に対してそのギャップを埋めて欲しい、すなわち教師が思うほど規範意識が低くもなく、逸脱的でもない自分たち女子大学生の本当の姿を知って欲しい、という気持ちをもっているかどうかまでは今回の研究からはわからない。しかし、もし彼女たちにそのような気持ちがなかったとしたら、それは教師が自分たちのことを理解してくれる可能性に期待していないことを意味するものであり、お互いに理解し合えない（あるいはそう思っている）この状態は、同じ空間と時間を共有する教師と学生との関係として、これほど不幸で非生産的なことはないだろう。そしていつまでたっても、教師は学生のことを規範意識が希薄だと嘆き、「昔の学生はそうではなかった。もっとしっかりせよ」と学生を叱咤激励し、それに対して学生はそのような教師の嘆きや教師による叱責・激励を無視するか、あるいは「それは自分のことについて言われているのではない」と聞き流す、という現在の意志の疎通を欠いた教師と学生との関係は変わらないであろう。

しかしもしそうではなく、自分たち女子大学生の本当の姿を知って欲しいという気持ちをいただき、教師の理解に期待をいただいているとしたら、少しでもその期待に応えるよう努力することが、現在の教師に課せられた責務であるといえよう。

中野収(1985)⁴⁾は、1980年代をさまざまな価値を相対化してしまう、本格的な文化の成熟期であると見ている。その前の70年代には、価値を再建し、統合しようとする気持ちが若者たちの気持ちの底流としてまだ流れていたが、そのような価値への希求は、80年前後には文化の洗練の前に終焉してしまったとみなす。

そのような変化の中で、若者の意識の中からイデオロギーと権威が消え去り、それまでそれを支えてきた価値の多様化が進行した。そして若者一般の意識や関心が、それまでの公的な領域から私的な領域へと移りはじめ、個別主義、私生活中心主義、享楽主義などが若者の意識の中に深く根を広げはじめたのである。ここに至って、若者の意識はある価値の周辺に収斂することをやめ、心情や行動において個性的、多元的な様相を呈するようになった。そして、一義的にある価値にコミットする態度は「ダサ」さの象徴として忌避されるようになった。

このような時代の変化の中で、さまざまな規範が変化の波に洗われているのは当然であり、同じ規範がその構造や機能を全く変化させることなく、長期にわたってその強制力を発揮し、社会的行動の客観的なフレーム・オブ・レファレンスとして機能し続けるというのは、もはや幻想にすぎないというべきなのかもしれない。

今回は若者の意識の変化を規範意識の観点から分析してみたが、この変化を「低下」という言葉で置き換えて論じ続ける限り、若者はいつまでたっても、おとなにとっては「新人類」であり「異星人」であり続けるであろう。

引用文献

- 1) 安藤明人, 大学生の規範意識と社会的自己に関する社会心理学的研究 Σ , No.8, 101-110(1990a).
- 2) 安藤明人, 女子大学生の大学適応に関する研究 (1) - 大学への動機づけ, 人格特性と適応との関連 -, 武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編), 37, 123-135(1990b).
- 3) 清水賢二, 非行少年の規範意識, 日本教育社会学会第40回大会発表要旨集録, pp. 161-162(1988).
- 4) 中野収, 若者文化の記号論, PHP 研究所(1985).